

辺野古の基地建設計画は、1996年のSACO(沖縄に関する特別行動委員会)最終報告の中で、沖縄宜野湾市にある普天間基地を返還する代わりの代替基地として建設計画が持ち上がりました。現在は、事実上の基地建設着工である「ボーリング調査」が日本政府、那覇防衛施設局によって進められようとしており、それを止めるために、住民による座り込みと海上での阻止行動が連日のように繰り返されています。

今こそ辺野古・基地建設「白紙撤回」の世論を!

沖縄・辺野古の新しい米軍基地建設を阻止するための座り込み、海上での阻止行動は、1年と3ヶ月を超えました。これまで、どんな暑い日も、冷たい風が吹く冬の日も、雨の日も、住民たちは朝早くから夕方まで海の上のやぐら(ボーリングのための単管足場)に張り付き、作業船が近づくとその前に飛び込んで、立ちはだかつてその航行を止めるという阻止行動が続けられてきました。そして、那覇防衛施設局が2004年度中に終わるはずであった63箇所のボーリング調査を、今の今までただの一度もさせないという状況を生み、追い

詰められた日米両政府は、在日米軍再編協議の中で、辺野古移設を再検討する方針を打ち出してきました。

しかし、このように基地建設計画そのものが流動化している最中の4月20日、那覇防衛施設局は、これまでで最も多い12隻ものチャーター船を出港させ、新たなやぐらの設置を強行しようとしてきました。そして、26日に至っては、施設局自らがまとめた「作業計画」の「作業時間を日の出1時間あとから日没1時間前までの間で設定」という規定を反故にして、午前3時から作業を開始するという暴挙に

でました。その後も施設局は、深夜まで作業を続ける姿勢を見せ、住民たちは24時間体制でやぐらに泊まり込み、阻止行動にあたるという異常な事態を強いられたのです。このことで、沖縄、そして全国各地で再三に渡る夜間作業中止の申し入れ・抗議行動が行われ、施設局は1ヶ月以上経った後、ようやく夜間に船を出さないという方針を出しました。しかし、辺野古現地はまだまだ予断を許さない状況にあり、陸上での夜間警戒態勢、見張りは現在でも続いています。

私たちは、辺野古に関して様々な

情報が行き交う中であっても、政府の揺さぶりに踊らされることなく、着実に行動していかなければなりません。政府が遅々として進まない「辺野古」を前に追い詰められていることは明らかです。だからこそ、今このときに、辺野古を本当の意味で白紙撤回させる世論が必要なのです。辺野古へ行ける方は辺野古へ。もちろんカンパも必要です。そして、何よりも一人ひとりが声をあげていくことが肝心なのです。共に行動してください。



第一次署名提出行動

1月20日、沖縄・辺野古沖でのボーリング調査の即時中止と、基地建設計画の白紙撤回を求める2700筆の署名を大阪防衛施設局に提出しました。



差し止め訴訟

12月27日、ボーリング調査に反対する市民や近隣海域の海人ら68人が原告となり、国を相手にボーリング調査の差し止めを求める訴訟を那覇地裁に起こしました。



第二次署名提出行動

第2次署名提出行動には、前回の35名を超える人の参加がありました。



単管足場

リーフ内の4箇所建てられている単管足場には、ウェットスーツを着込んだ4~5名の人が上り、その四方には海人の船がびっしり張り付いて、施設局の作業を止めています。



スパット台船

スパット台船を積んだクレーン船と、その航行を止めようと何度か前に割って入る小型船。ついには、クレーンでスパット台船を吊り上げ、降ろそうとしている場所に陣取り、スパット台船を設置させなかった。



海人

辺野古の海を守るために駆けつけている国頭、東、金武、宜野座、石川の海人たち。

